〔伯耆卷〕觀應三年五月十一日、主上（後村上）八幡を御開ありて、芳野へ落させ給ひしとき、內侍所の御櫃を持けるもの、敵に支られて捨行けるを、名和伯耆守長年が姪、大井太郎左衞門尉長重見つけ奉り、馬よりおり若黨に持せ、防矢を射、矢種盡ぬれば、みづから戰ひ創を被りけり、御櫃にも矢十三まで中りけれども內には洞らず、恙なくして賀名生の御所にぞ着せ給ひける、

〔園太曆〕觀應三年（文和元年）八月十四日甲寅、頭辨仲房朝臣來、執柄（藤原良基）使也、內侍所奉渡事、幷御名字事等也、（中略）

內侍所御辛櫃可被奉渡間事、先日內々御問時、愚意所存大概言上乎、所詮以件御辛櫃、可被致如在尊崇之上者、偏爲武家沙汰、進置內裏之條、若可爲聊爾歟、當時御座雖爲何所、爲武家沙汰奉渡六條若宮、女官參向件社、申沙汰渡御之條、可爲折中之儀矣、

十八日戊午、踐祚儀、（後光嚴）今日午刻許事了云云、

〔匡遠記〕觀應三年八月十七日丁巳、今日院第三皇子、（御諱彌仁、後光嚴、春秋十五歲、御母三位殿、新院（崇光）御母弟也、）御踐祚儀也、仍匡遠酉終刻、先參向佐女牛若宮、內侍所御辛櫃渡御事、爲申沙汰也、戌終許、御辛櫃渡御、（其次第注與、中略）內侍所御辛櫃渡御事、別被仰下之間、匡遠今夜先參向佐女牛若宮、令申沙汰奉渡內裏畢、朱漆御辛櫃一合也、（去五月、武家差進賢後僧正於八幡奉渡此辛櫃、）駕輿丁等如例奉舁之、神前簾外立黑漆机、其上奉安置之間、刀自進舁奉出之、本社禰宜（稱兵衞大夫盛兼、著布衣、）爲案內者、令參候者也、右大史盛宜、並刀自即令供奉云云、可爲密儀之旨被仰下之間、非普通者也、此條兼內々被經沙汰、如此治定云云、相催賀輿丁等之外、官方無殊沙汰、刀自參入事、自殿下被召仰、

〔續神皇正統記（後光嚴）〕踐祚の日、三種靈寶渡御なき事、繼體天皇の佳躅を尋ねて、被准擬侍とかや、（中略）內侍所御辛櫃、佐女牛若宮寶殿に置れけるを、今夜密々に內裏に渡入奉る、如在の禮奠に擬せられ侍にや、